



附属特別支援学校と大阪教育大学美術・書道教育部門との連携による土粘土を用いた造形活動の展開 「どろんこプロジェクト」

Keyword：知的障害教育、土粘土、造形表現、操作

研究の目的

1. 附属特別支援学校と大阪教育大学美術・書道教育部門との連携を促進
2. 主体的・対話的で深い学びに導くための支援や環境設定の構築
3. 知的障害特別支援学校における手指の巧緻性発達を促すプロジェクトの模索

1、2年目の取り組み内容

前年度までに粘土の再生及び感触遊び、身体を用いたお皿づくり(成形)、釉薬掛け(施釉)、大学に設置されている窯の見学、作品鑑賞を行ってきた。粘土造形における幅広い活動を経験すると共に、焼きものづくりにおける全工程をたどることができた。研究1年目は粘土という素材に対する拒否感や抵抗感を示す児童も見られたが、2年に渡って粘土を扱うことで児童が進んで粘土に触れたり、感触を楽しんだりする様子が見られるようになった。

3年目(今年度)の取り組み内容

今年度は新型コロナウイルスへの感染症対策のため、小学部全17名の児童を5～6名の小集団に分けて3グループによる態勢で授業を展開した。また、2年間に渡って活動を継続したことによって生じている児童の経験の差に対応するため、「土粘土と出会い慣れる段階」と「土粘土に親しみ造形表現を楽しむ段階」の段階設定を行った。それらの段階に応じて、様々な形状の土や粘土に親しんだり、固く乾いた粘土の塊を砕き、篩(ふるい)にかけ、水を加えて混ぜ合わせることで粘土の形状が様々に変化していく状態を肌で感じたりした。また、粘土にじっくり触れて、児童一人ひとりが粘土と向き合う時間を設定した。児童が自分から粘土に触れ、ちぎったり、丸めたり、くっつけたりする中で、素材と自分との関係を主体的に築いていく様子が見られた。粘土に対して様々な働きかけを経験した後、タライや素焼きの鉢を型にして、植木づくりを行った。活動の締め括りとして、焼成後の植木鉢を鑑賞し、3種類の花の球根を植えて校庭に設置した。

1 身近な土に触れる 粘土をつくる

乾燥した粘土の塊を金槌や木槌で砕き、篩(ふるい)にかける。次に、砂粒状の粘土に少しずつ水を加えていく。



2 粘土に触れる

児童一人ひとりが粘土とじっくり向き合う。つまんで、叩いて、ちぎって、くっつけて・・・



3 植木鉢をつくる

成形は型づくりの技法で行った。タライや素焼きの鉢を型に用いて、2種類の粘土(白土と赤土)を思いのままにくっつけていく。



4 鑑賞&鉢植え

大学からビデオレターが届き、皆で観る。焼きあがった植木鉢について温かいメッセージをもらう。その後、植木鉢に花の球根を植える。



土粘土と出会い慣れる段階

- 活動量の確保：繰り返すことで、見通しをもつ
- ダイナミックな活動：シートや道具の用意
- 集団の力：周囲の様子を見て「やってみようかな」

土粘土に親しみ造形表現を楽しむ段階

- 活動量の確保：繰り返すことで、粘土操作の定着を図る
- 集団の力：周囲と同じ操作をして「楽しいな」

- 見立てやイメージの形成
「もっと～したいな」

結果・考察

1. 土粘土の心理的效果

手になじみやすく、何度でもやり直しがきく素材である粘土の「触覚的な安心感」(中川, 2005)に着目し、じっくりかわる授業環境を整えた。

2. 児童の土粘土操作

土粘土を扱い始めて3年を迎えるB・Cグループ児童10名の操作要素を観察した結果をグラフで示した。Bグループは「接触」が多く、活動継続時間が2分の児童から10分続く児童と幅があり、活動停止に伴う教師の介入もあった。Cグループは「複合」が最も多く、活動は全員がほぼ10分続いた。

3. エピソード記録の変化

エピソード上でも、粘土を触り続ける中で、粘土操作に自発的な手の動きが多くみられるようになってきた。粘土を複数年にわたって取り扱うことで児童が慣れ、活動に見通しが持てたことが作用していると推察される。

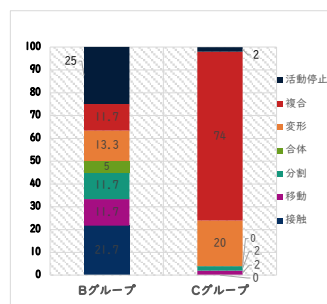


図1 10分間中にみられた操作要素割合(%)

A	B	C
平らな粘土が机の上にある	B児 両手の人差し指と中指の先で粘土の表面を滑らせる	粘土表面への字のような線ができ、指先に粘土が寄る
粘土表面への字のような線ができ、指先に粘土が寄る	B児 線を見て、指先の粘土をつまみ、顔に近づける	粘土の形がかわる
粘土の形がかわる	B児 粘土を土台にくっつけ、再び裏から手前に指を滑らせる	粘土の模様が増える
粘土の模様が増える	B児 端から粘土をめくり、丸める	粘土が手に沿って転がる、教師が「コロコロいいね」と言う
粘土が手に沿って転がる、教師が「コロコロいいね」と言う	B児 コロコロ続ける	C児、D児も同じ動作をし始める

表1 児童のエピソード記録(一部抜粋)

今後に向けて

Aグループは、児童のやってみようという小さな変化を大切に、遊びを通じて粘土に触れる時間と場を丁寧に積み重ねていくことを続けていきたい。B・Cグループでは各集団の発達段階に応じて扱う粘土の量を増やしたり、児童が好きな方法でより主体的に粘土操作を行えるような授業のあり方を考えたい。今年度行ったような共同製作や、児童個人の主体性をより生かした個人製作を取り入れること等、児童の粘土操作の実態に応じた発展の仕方を検討したい。今後も感染症対策は引き続き求められることが予想される中で、皆が安心して活動ができるように環境を整備し、子ども達が粘土に関わり、粘土そのものの手ごたえを感じ、つくりだす喜びを得られるように研究を進めていく。

